第２回講義　ウェスレーの神学的源泉

この講義に関しては以下の書が有効です。

参考書：清水光雄著　『ウェスレーの救済論　東方・西方思想の統合』教文館
『ウェスレー・メソジスト研究１』「藤本満　アナロギア・フィデイとウェスレーの神学原則」（教文館、２０００）をお読みください。この論文は、四支柱と信仰の持ち方を丁寧に解説したものです。

テキストの要約　　藤本　満『ウェスレー』の８９頁～１１５頁

*ウェスレーの神学①キリスト体験の神学とし、特に個人の体験と伝統と教会の共同体がかみあっていることの大切さを語られています。ウェスレーは経験(experience)よりも実験(experiment)を好んだのです。つまり、これは個人的な霊的体験も、聖書・伝統・理性の中で試され、その真偽を実証できるというものでした。（１０３頁）

*聖化の神学の項では、ウェスレーの目標は、神があらかじめ備えてくさったよい行いに歩むように、キリスト・イエスにあって新しく造られること。ウェスレー神学はプロテスタント的な十字架の神学とカトリック的な栄光の神学が見事に合体している姿を見ることができる。（１１１頁）

ウェスレーの引用

ウェスレーは、神秘主義も含めて様々な伝統の影響を受けました。「私は神秘主義の著作家たち、特に神との一体についての描写や内的な宗教はすべての事柄がその通りに顕れることを意味するといったようなことに精通して育った。・・・これらは私に宗教の全く新しい見解、今まで私が持っていなかったようなものをもたらした。」（1738.1.24）と語っています。信仰は「神における確かな信頼と確信であり、キリストの功績によって私の罪は赦され、神との和解を得ることができる」としたのです。ウェスレーは救いの自覚を実感できる事を大切していました。

モラヴィア派の影響と相違点

ウェスレーは、モラヴィア派の影響をアメリカに行く船の中で受けます。嵐の中恐れるウェスレーが船底にいくと、モラヴィア派の人々が熱心に祈りと賛美をささげていました。彼らに「死ぬのは怖くないのか」と問うと、彼らは、「神の守りがあるから怖くない」と語ります。

帰国後、ペーター・ベーラーにより信仰の確信について説得され、その影響を受けつつ、モラヴィア派の拠点、フェッターレインソサエティに参加するのですが、一つの疑問が生じます。それはモラヴィア派の静寂主義を拒絶したことにあります。特に、彼らが様々な

恵みの手段を使用せず信仰の度合い（強い信仰、弱い信仰）を否定し、キリストのみを恵みの手段とする彼らにはついていけませんでした。それが最終的に決裂することになります。

様々な以下の神学との対話に関しては
http://www012.upp.so-net.ne.jp/marksakamoto/wes3.htmを参照していただければと思いますが、以下に要点だけ述べておきます。

宗教改革神学との対話

ウェスレーはプロテスタント宗教改革を認めていました。ウェスレーは明確にアルミニアンでした。アルミニウスの神学は①自由意志　②予定説の拒否　③キリストは一部の選ばれた人の為だけでなく、すべての人のために死なれたという確信でした。

第２の視点はウェスレー神学と宗教改革との関連である。この立場の基礎となったものは１７３８年のアルダスゲート街での回心を宗教改革の原則である信仰義認を獲得した回心として定義したことである。

宗教改革神学との対話委の研究で特に著名なものはマキシム・ピエトのものです。(Maximin Piette, La Reaction Wesleyenne dans l' Evolution Protestante, Augste Picard, 1925) 彼はウェスレー神学をプロテスタント宗教改革の枠組の中でなされるべきだと語り、ウェスレーのプロテスタント主義への貢献は宗教経験の復権であるとします。ピエトに続く神学者としてクラフト・セルをあげることができます。(George Craft Cell, The Rediscovery of John Wesely , University Press of America, 1935.)　セルはウェスレー神学をカルヴァン主義、ルター主義と共にプロテスタント神学を代表するものとして紹介します。セルは義認と聖化の両教理は、ウェスレーによって独特な仕方で融合され、総合的に理解されているのですが、この総合は、プロテスタントの恵みの倫理とカトリックのホーリネス思想との結合であるとしています。セルはウェスレーが義認と聖化の総合において、キリストを通してなされた我々のための神の働き（義認）と、聖霊を通して我々の中でなされる神の働き（聖化）との総合において、ウェスレーが宗教改革者たちの諸原理の限界を越えたということを熱心に指摘しています。

宗教改革との関わりからウェスレーを考察する日本における代表的な神学者が野呂芳男先生である。野呂先生はウェスレーの神学を楕円の神学と呼びました。野呂先生はウェスレーの中にある第１の回心である高教会主義的側面と第２の回心である宗教改革的側面を影響を及ぼし合う楕円として捉え、両焦点の中心要素が互いに浸透し合い絡み合っているとしました。ウェスレー神学を宗教改革との関わりで見る立場は、この回心を通してウェスレー神学をカルヴァン主義やピューリタン神学に接近させる立場です。この研究は確かに有効ですが、ウェスレーの生涯を前期と中期、一回目の講義でいうならば、一回目の回心と２回目の回心からしか見てないところに欠点があります。むしろ、後期ウェスレーこ

こそ、彼の神学の真価が発揮されるのですから、そこまで含めた理解が必要でしょう。

その他の注目されるべき著作としてはキリスト論においてはジョン・デシュナーの著書『ウェスレーのキリスト論』(John Wesley's Christology)が有名です。デシュナーもウェスレーのキリスト論を西方の理解に基づいて考察する。デシュナーはキリストの祭司的働きの中で王的働き、預言者的働きを考察していることが特徴的です。ウェスレーの聖霊論を取り扱ったものに、Ｌ・Ｍ・スターキーの『ウェスレーの聖霊の神学』があります。聖霊の役割はキリストのみ業の成就・完成を可能にすることです。それは、ウェスレーが救いを「神がキリストにおいてわれらのために、聖霊によってわれらのうちになされる尊きみ業である」として理解していることにも示される。これがウェスレー神学の中心であるとスターキーは語ります。特に確証の教理の重要性を彼は強調しました。

ピューリタンとの対話

ウェスレーはピューリタンの著作家たちを引用し、ピューリタンの教理である原罪の教理、信仰による義認、確信、最後の義認を信じていました。ウェスレーはピューリタンの伝道の方法を用い、自己を探り、省察することを強調しました。しかし、政治的な側面ではウェスレーはピューリタンの分離主義的な傾向を拒否しました。これは彼の出身が高教会主義（儀式に高い位置を与える英国教会内の立場）であったことに起因します。

ウェスレーの全体的な神学的傾向は、アングリカンの思考によって影響されていることは疑いありません。ウェスレーは１８世紀の英国教会の神学から直接、神学的な理解を受け取ったということといえます。

ウェスレー神学の西方的視点をピューリタンとの関連からとらえたものに、ロバート・モンクの著書『ウェスレー　-ピューリタン的遺産-』があります。この本は表題通りに、ウェスレー神学の中にあるピューリタン的要素を研究したものです。モンクはピューリタンの特色として宗教生活の純粋さ、教会政治の純粋さを保護することをあげ、聖書を重んじつつも、伝統的な側面に必ずしも固執しない改革可能な姿勢をあげる。この指摘はウェスレーの実践的側面、英国教会からの分離の根拠ともなり得るものであり興味深いものがあります。

ウェスレーへのピューリタンの影響は彼が収集していたクリスチャンライブラリーにおいても見ることができます。クリスチャンライブラリーは信仰の実践的側面があり、信仰の成長に有効な書物を集めたものです。

英国教会の神学との対話

アングリカニズムは以下のものに焦点をおいています。

①　付与の義の強調（転嫁の義ではなく）

②　神学的結論の中心としてのキリスト

③　聖書は信仰の唯一の規範

④ 中庸(via media)の思想
⑤ 初代教会に倣う
⑥ 心と生活のホーリネス

このトピックの代表的な研究がフランク・ベーカーの大著です。（Frank Baker, John Wesley and the Church of England, Abingdon Press, 1970.）ベーカーはウェスレーの生涯を通して英国教会との関わりを事実に則して様々な角度から論述します。ウェスレーは英国教会から離れたことにおいて新しい教会論を提示したのではなく、英国教会の衰退を癒すものをもたらそうと試みました。ウェスレーは英国教会を霊的に改革する為に、伝統的には存在しなかった様々な実践的方法を生み出しました。ウェスレーは聖書、伝統、理性を重視したが、彼は同時に宗教的な実践主義者であったとします。それが最もあらわれたのが分離の時です。アメリカに派遣する者への按手による分離の原因は、英国教会の規則や教理に従いつつも、神の特別な業に召された場合には、規則は変更可能なものとして捉えていたことにあるとてし、ウェスレーの為したことは、論理的に整合性をもったものであったと結論しています。

日本でも岸田　紀先生が『ジョン・ウェズリ研究』を１９７７年に出版され、英国教会の中の高教会主義的アルミニアニズムに立つウェスレー像を打ち出しました。岸田は英国教会史の一面からウェスレーの運動を分析し、ウェスレーの倫理体系がカルヴァン主義のそれと異なり、慈善の体系に位置していることをマックス・ウェーバーとの比較から考察します。さらに、ウィリアム・ローの召命観とジェレミー・テイラーの返還の思想を引き合いにだしながら、ウェスレーのアングリカン高教会主義者に立つアルメニアン神学に則った慈善理解を強調されています。

岸田先生は、ウェスレーの「よきわざ」理解は、アルメニアンの主張する「普遍的召命」の「わざ」である「断食、祈り、慈善」という世俗外的な三種の「よきわざ」を意味し、それは高教会アルメニアンの「よきわざ」理解に立ち、カルヴァンの「職業」倫理体系の「よきわざ」の「職業」労働とは異質のものであると結論しました。

第１回目の講座で学んだように、初期においてウェスレーに影響を与えた人物としてウィリアム・ロー、ジェレミー・テイラー、トマス・ア・ケンピスの３人が挙げられますが、ジェレミー・テイラーの影響は最も大きいと筆者は考えます。その意味でも岸田先生の研究は興味深いものがあります。

私の興味は、ウェスレー自身の神学的立場以上に、高教会主義者として歩んできたウェスレーが、何故野外説教や組会等の実践的手段を用いた大胆な改革をすることができたのかということです。この実践的メソジズムには、高教会主義的な立場と共に、ピューリタニズム、モラヴィア派などの様々な思想の役割が見られることは言うまでもありませんしかし、その基礎となったものは、ウェスレーが生まれ育ってきた英国教会の中に育まれてきた実践性及びウェスレー独自の福音理解ではないかと考える。それをディヴィニティという用語から理解できると思います。これは神学という頭で考えるだけのものでなく、実

践につながっているからです。

東方神学と西方神学

東方神学は、リタージカルで実践的な神学傾向があります。人間の本来の状態への高評価、人間が変化していくための潜在能力を認める傾向にあります。東方神学の救いと聖化は神の恵みによってなされ、現実の変容に焦点が置かれ、この世の生活において霊的な成長について楽観主義的です。東方神学は、神の恵みにおける私たちの責任に関する適切な立場、つまり共働説と呼ばれる立場を保持しています。ウェスレーに影響を与えた東方神学の教父たちに、イレナエオス、アレキサンドリアのクレメンス、オリゲネス、マカリウス、ジョン・クリュソストモス、シルスのエフライムがいます。これらの人々と共に、ウェスレーは経験とホーリネスの生活を強調しました。日本における研究も以前は、西方神学との関係が主に研究されていましたが、最近は東方教会とウェスレーの関係も注目を集めています。

ウェスレー神学の東方教会との関わりにおいては、まず、創造論を中心に神学を構築したテオドア・ランヨンの著作をあげなければならなりません。(Theodore Runyon, New Creation -John Wesley's Theology Today- , Abingdon Press 1998.)
「新しい創造」(New Creation)における恵みは、先行する恵みに始まり義認（再生）を通して聖化の中にあらわれます。ランヨンはウェスレーの基礎には東方の見解が存在すると主張します。ウェスレー神学には、東方の思想としての神のパートナーである人間の役割の強調があり、キリストのみが義認の条件であることが確認された上で、キリストの霊と人間の霊の呼応関係における協働的な理解が存在することを強調します。ランヨンのウェスレー理解は次の３つの用語に示されます。「オーソドキシーは」正しい教理を意味します。「オーソプラキシー」は正しい実践を意味し、抑圧と戦い、正義を求める姿勢です。ランヨンによれば、人はオーソドキシーを持っていても宗教を持たないこともあり得るとします。純粋な信仰は正統な教理を所持しているだけでなく、聖霊が主導を握り人々との関係を設立するところにおいて実践を生み出していくものです。しかし、「オーソドキシー」「オーソプラキシー」だけでも不十分なのです。また両者を連結するだけでもいけません。第３の要素は何か。それは「オーソパシー」である。これは正しい感情、愛情、経験を意味します。オーソパシーとは正統的なキリスト者の信仰である。神の恵みは人が経験できる恵みとして捉えられます。

私はこの指摘は重要であり、これがウェスレーの経験的神学(Experimental Divinity)を生み出したと考えます。転嫁(imputed righteousness)ではなく付与としての神の義(imparted righteousness)が強調されることがウェスレー神学においては欠かせません。

清水光雄先生は１９９２年に『ウェスレーの宗教思想』を出版し、ウェスレー神学の思想的背景を取り扱いました。 清水先生はウェスレーの中にある共存思想に注目し、ウェスレーの認識論において、主観客観構造を超えた知にウェスレーの独自性を発見します。清

水先生は、ウェスレーの第１回目の回心を英国教会の高教会主義的回心、第２回目の回心を宗教改革的回心として捉えてきたことへの疑問を提出します。これはウェスレー神学をＡからＢへと捉えるのではなく、ＡとＢの統合として考えることが重要だというのです。第２にウェスレー自身を全生涯にわたって研究していく必要性を提唱している。この指摘はウェスレー神学研究の中心的人物であったアルバート・アウトラーによって最初に提出されたものです。アウトラーが、ウェスレー全集を編集するなかで、従来の区分ではなく、ウェスレーの生涯にわたる３区分を提唱したものを清水先生はそれを継承しているのです。

最後にランディ・マドックスの『応答する恵み　-ジョン・ウェスレーの実践的神学-』(Responsible Grace)も注目すべき書物です。マドックスはウェスレー神学の実践的側面に注目し、ウェスレー神学を恵みの概念に基づいて、３つの時期に分けて考えます。初期（道徳的正しさや神の似姿への変容）、中期（恵みの教理、プロテスタント的特徴の確立）、後期（キリスト教ホーリネスへの恵みの統合）という３時期である。そして本題でもある、神の恵みは人間の責任ある応答を引き出すという視点を基本にして、ウェスレーの中の西方、東方を考察します。ウェスレーにおいてキリスト者生活は神の愛に応答するところに営まれる。ウェスレー神学の西方・東方概念の共存は審判者の神と共に医者としての神を強調する点に現れている。ウェスレーの神は無感情の神というよりも親というイメージが強く、人を支え、癒す神です。

以上、様々な立場との接点を見て来ました、いずれにせよ高教会主義的立場、ピューリタン的立場、宗教改革的立場、東方教会の立場のいずれかにたてこもって、ウェスレー神学の一切をそこからだけ理解する態度をとる必要はないと考えます。逆に言えば、ウェスレー神学こそ、様々な神学を統合する包括的要素を持った神学だと私は信じています。

ウェスレーの四支柱　聖書と伝統

学習者の目的

① ウェスレーの四支柱の機能について評価する

② 解釈学的な原則としてのウェスレーの「信仰の類比」を定義する。（この点に関しては、『ウェスレー・メソジスト研究１』「藤本満　アナロギア・フィデイとウェスレーの神学原則」（教文館、２０００）を参照のこと

③ 伝統としてウェスレーがいかに初代教会とアングリカンチャーチを優先したことを認識する。

支柱　１　聖書

ウェスレーの引用

ウェスレーは数千冊もの本を価値あるものとみなしました。

神ご自身は、天から来られた多くの目的を私たちに告げるために道を示されました。神はそれを１冊の本に書かれました。その本を私にください。値段がどれだけ高かろうとも、神の書を私にください。幸いにも私はそれを持っています。そこには十分な知識が詰まっています。私を一書の人としてください。

Preface to Sermons on several occasion, Outler p.88.

聖書についてウェスレーは以下のように記します。

聖書は信仰と実践の完全な規則であります。それらは、すべての必要な点において非常に明快です。しかしその明快さがあるから、解説は不要だというわけではありません。またすでに完成されたものであるからといって、強要する必要がないのではありません。最初の３世紀の著書を評価するとすれば、それらは聖書と等しいのではなく、聖書の次に重要なものですが、人を危険に陥れようとしたり、現実に陥れることもないでしょう

聖書は、他の支柱との対話によって正しく解釈されるべきです。その場合、聖書は他の３つの支柱の究極的な精査を行うものとして用いられます。ウェスレーは決してそれを直接的に語っているのではありませんが、聖書はウェスレーの「神学的な方法」において第一に優先するものであり、聖書が、神学を行い、聖書を解釈する方法であると言えます。

しかしより、保守的な伝統にいる人々は、聖書はすべての事柄において無謬であると議論するでしょう。しかしウェスレーに従う者は「救いに付随する」事柄すべてにおいては誤りがないと語ります。

つまり、聖書の霊感に関するウェスレーの立場は、中庸(Via Media)の立場、十全霊感の教理をとりました。神は聖書の著者たちに、彼らの人間的、歴史的、文化的状況は無視されるのではなく、役立つ形で霊感を与えました。逐語霊感説のように彼らの手だけでなく、神の愛を伝え、目標を持ち、人間の贖いの計画のために著者の心も経験も神によって用いられたのです。

ナザレン教団は以下のように定義しています。

私たちは、聖書の完全霊感を信じる。すなわち、旧新約聖書六六巻は、神の霊感によって記され、私たちの救いに必要なすべてのことについて、神のみこころを誤りなく啓示している。いかなることも信仰箇条としてはならない。

（ナザレン教団の信仰箇条より）

ウェスレーの引用

ウェスレーはある哲学的な立場に同意をしていました。「知覚されないもので心に残るものはない」(An Earnest Appeal to Men of Reason and Religion Works 11:56)

チャールズ・ウェスレーは以下のように語っています。「神の霊が私の心に語るものは何であっても書かれた言葉（聖書）が同意するものでなければならない」

啓示

伝統的に、啓示は２つの範疇に分割できます。

一般的、自然の啓示

特別啓示

一般的・自然の啓示は、神についてのある程度の知識は創造や、自然、人間の人格がいかに複雑に創造されているかをみることによって与えられるというものです。

特別な啓示　特別な啓示は、神がどのようなお方かを知る上で大切なものです。究極の特別な啓示はイエス・キリストです。投手啓示のみが伝統的には、神の恵み深い活動であるとみられています。ウェスレーは自然の啓示そのものは恵みの顕れであると考えました。特別啓示は、自然の啓示で開始された啓示の成就であり、すべての知識は神の主権のもとで人間に届くのです。

先行する恵み

ウェスレーは、先行する恵みは、人間にある程度の光を与え、それによって、その人の文化的、歴史的、宗教的な文脈がどのようなものであるにもかかわらず、霊的感覚が覚まされると考えました。

ウェスレーは、神に対する理解において特別啓示が重要なものであると考えました。聖書はイエスがキリストであることを証しする為に書かれたものです。聖書は神の啓示を媒介するものです。確かに啓示は、神から直接的に、即座に与えられるものでもあります。ウェスレーは両者が正しいと考えます。ランディ・マドックスは以下のように語ります。「神の決定的な啓示は、聖書を通して私たちに与えられるが、それは直接にも啓示されるものです。なぜならば、聖霊は聖書の著者たちに霊感を与えるのみならず、彼らが表現する真理を検証してくれるのです。」

信仰の類比

ウェスレーは「信仰の類比」と呼ばれるものを発展させました。これは、聖書的な教理は、「聖書の全体性」から起こってくるという聖書の箇所の関連性において語られる教理です。私たちは聖書のどの箇所においても、人間の罪、信仰による義認、新生、現在の内的なホ

ーリネス、外的ホーリネスに関して、いかに理解を増し加えてくれるかという問いを持ちつつ読むことができます。

本質的な罪、救い、聖化の教理を唱道していない箇所は、非本質的な箇所として考えることができますが、ウェスレーの関心はキリスト者の一致でした。キリスト者はしばしば不一致に陥り、非本質的なものについて議論し、キリストの体を分裂させることがあります。ウェスレーは、人々が謙虚であることを望み、救いにとっては非本質的なものについては、別の意見を持つことが可能であると考えました。この見解こそ、ウェスレアンホーリネスの伝統にとっては重要なものです。これはウェスレーの「公同的精神」という説教の中にあらわれています。

聖書はキリストを証しすることにおいて権威があると考えられました。キリストによる救いの真理は、数世紀にわたり、信仰者によって経験され、検証されるのです。

説教資料３　「公同的精神」を読みましょう。

支柱２　伝統

ウェスレーはキリスト教の歴史において２つの点を最も重要視していました。

第１に、**初代教会の著作家たち**に高評価を与えていました。

第２に、**アングリカンチャーチ**それ自体を初代教会の精神の新たに具現化したものであると考えていました。

ウェスレーは伝統を大切にしましたが、決してそれに固執していたわけではありません。たとえば、野外説教をホイットフィールドにすすめられるのですが、伝統的には英国教会は野外での説教を許可していません。しかし、聖書ではイエスが野外説教をされています。この場合にウェスレーは聖書を優先します。ウェスレーは実践的に、伝統を用いていたということができるでしょう。　伝統はウェスレーにとって静的なものではなく、人々の手にある福音の真理でした。状況に応じて神のみこころを探るウェスレーの素晴らしさを見ます。

支柱　３　理性

ウェスレーは熱狂主義をかなり疑っており、理性的な部分がない宗教には懐疑的でした。ウェスレーは、霊的な知覚を通して得られた経験を信じており、それが人間の知識の主要な根源であると考えていました。理性が行うことは、これらの経験を通して、それらが自分にとって意味あるものでることを教え、他者に得たものを伝達することを助けます。

英国国教会において、理性は、ただ単に知的な理性というよりも、経験も含めた広い意味で使用されていました。ですから理性は総合的な知をも意味していたことを理解してください。つまり理性は物事を総合的に理解する道具であったのです。しかし、ウェスレーはあえてそれに経験を強調しました。

支柱４　経験

ウェスレーの経験の教理が個人的なものでなく共同体的なものであることを考えています。

ウェスレーの引用

チャールズ・ウェスレーは知識と霊性の関係を示す賛美歌を書きました。

長らく分離されていたものをつなげよう
知識と大切な敬虔さ
学びとホーリネスをつなげよう
真理と愛を皆に示そう
これらのものをあなたたちに与える
三位一体の神のために死に生きる
父よ、あなたの子によって私たちを受け入れてください
あなたの聖霊によって導いてください
私たちの生き様においてあなたの知識が示されます
あなたの名前が告白され、栄光を受けます。
あなたの働きと愛が広くいきわたります
神の名が地上のすべてに満ちるまで

「祈り」より

ウェスレーは心の宗教を強く信じていました。キリスト者は自分の人生の上で神の救いの愛に対する確信を経験することができるのです。確証の教理は、聖霊の証しとも呼ばれるものですが、ウェスレーによってローマ８章１６節からとられたものです。ウェスレーは、人はすべての教理を確信しつつ、正しい教理を信じることが重要であると信じました。しかし、霊的には死んでいることがあるのです。神の恵みは個人個人に与えられ、確証を与え、心と生活を変化させるのです。

ウェスレーの聖化の立場への経験の影響

ウェスレーは聖化の教理を時間をかけて発展させました。聖化が瞬間的なものであるか、それとも過程を経て発展的に起こるものであるかは、メソジストが数十年規模で発展することと同時進行で発展してきました。ウェスレーは、聖書はある特定の事柄には沈黙していると考えていました。たとえば、聖化について、ホーリネスの生活がどのようであるかについては、様々な箇所で語っていますが、いかに、そしていつ聖化が達成されるか

については、詳細には語っていません。ウェスレーは、聖化は、発展的であると同時に瞬間的な経験であると考えていました。聖書は、個人の感情に基づいて解釈されるべきでなく、信仰共同体全体の基礎の上に立った上で、私たちに影響を与え、継続する影響をもたらすものであると考えていました。

創造的な三位一体の神

ウェスレーの引用

すべての教理は三位一体の教理で始まる。「あなたは宗教の偉大さは、神の像に更新されるように心を一新させることにある」

説教　『原罪』より　Works 2:185.

ウェスレーは創造における信託管理人の思想を保持していました。「私たちは神から信託された管理人です。私たちの持っているすべてのものは主から来るものです。管理人は、委ねられているものを自分の好きなように使用してはいけません。管理人は創造をもたらしたのではなく、被造物を委ねられているのです。さて、このことは神との関連においては誰にもいえることなのです。私たちは、神が私もたらしたものを自分の好きなように使用する自由はなく、むしろ天と地の所有者であり、すべての生き物の主である神が喜ぶように用いるのです。」

創造的な三位一体の神

私たちの属性は、通常、「自然の」「道徳的な」属性を意味するものです。

自然の属性は取り去ることのできない神から与えられるものであり、それらなしでは神は神であることをやめます。道徳的な属性は、神のすばらしさについてわたしたちに、洞察を与えてくれるものです。

ウェスレーは、神がどのようなお方であるかについての人の理解は、人々のキリスト者としての生に反映するものと考えました。もし人が神を誤解しているとすれば、信仰とキリスト者の実践も誤解しているのです。

神が愛であるという事実は、ウェスレーの神学においてはすべてを包含するものでした。ウェスレーはどのようが犠牲を払っても神の愛を維持しました。神は創造者であり、すべてを支えるお方です。つまり、すべての事柄は神から来る（無からの創造）であり、神が世界を支えておられるから、世界は今も継続しているのです。ウェスレーは三位一体の明快さを強調し、特に聖霊に特別の役割を与えていました。ウェスレーこそ、三位一体論者なのです。

資料４　説教「三位一体」を読もう

キリストの人格と聖霊の人格

ウェスレーの引用

あなたのなす説教において以下のことを宣言しなさい。キリスト者の第一で偉大な命令は「主イエス・キリストを信じなさい。キリストはすべてのすべてであられます。私たちの知恵、義、聖化、贖い、人生、愛、力は、キリストのみからきます。それは信仰を通して私たちに与えられます。」

（キリストを説教する　アウトラー　２３４－２３５頁）

私は無限で永遠なる神の聖霊を信じます。聖霊は父と子と等しくあられ、それ自体のみでは聖くなく、私たちの中に聖性をもたらす瞬間的な要因です。

（ローマ・カトリック教徒への手紙より）

キリストの人格

ウェスレーは初期の教会会議のキリスト論に従っていました。最初の４つの教会会議は、イエス・キリストの本性について正統的な見解を発展させました。イエス・キリストは全く神であり、父と同じ本質、存在を分かち合われ、神の本性を完全に、啓示された御方でした。ウェスレーはイエスが「真の神、真の人」として神のように完全であられ、真実の礼拝にふさわしいお方であると述べました。ウェスレーの強調はキリストの働きに強調点を起いたものでしたが、この教理は、救済論として知られているものです。ウェスレー神学のすべてにおいて、キリスト論は実践的な関連性を持っていました。ウェスレーはキリストの本性よりも働きに興味をもっていました。それ故に、キリストの本性を語る時には、実践的な含蓄が彼の思考にはありました。

聖霊の人格

聖霊はキリスト者の生活において神の臨在をもたらすものです。ウェスレーにとって、キリストは私たちの贖いを可能にしてくださっただけなく、その贖いは、聖霊の働きによって私たちにもたらされます。ウェスレアンホーリネスの伝統に生きる私たちは、改革派の伝統に生きる人々とくらべてより広く深い贖いの教理を持っています。聖霊は神の三位一体において人格としての性質を持ち、聖霊の存在は、神に従属した機能的なものではなく、地上のキリストの現臨を示すものです。要約してウェスレーは以下のように語ります。

私は無限で永遠なる神の聖霊を、父および子と同等であると信じる。ご自身がきよいだけでなく、この方は、私たちが聖くなれる主要な原因でもあられます。私たちの理解を覚醒し、私たちの人格をキリストにつなげ、神の子とされたことを確証させ、私たちの行動

を導き、魂とからだを神の完全で永遠な喜びの存在として、浄化し、聖化するのです。

（ローマ・カトリック教徒への手紙）

考えてみよう

私たちはどのように「宗教的真理」を知ることができるか、また「宗教的真理」について何を知っているのか。